

テル、ボムペイに泊つて居る事を知りながら、矢張聲をかける。やれ、カツプエーが幾何。マカロニーが幾何。チースが幾何と毎日同じ事を五月蠅く云ふ。一度も立寄つた事はなかつたが、終に此處を立つ迄呼び込まれた。日本人には到底これだけの馬鹿氣た根氣は無い。又寫生の時宿を出ると、その傍の客待の馬車が直ぐに乗れと勧める。毎日近邊に寫生に出懸けるのを心得ながら、毎日極りきつて五月蠅くつき纏ふ。總ての舉動に奈何しても亞刺比亞人風の野蠻な處がある。

### 車馬の無いヴェニス

□一週間の滞在も済んで、一月十三日ヴェニスに向つて出發した。一度ネーブルスに出て、ローマ、フロレンスを經て直行するのであるが、南部のボムペイでさへ寒さが中々強いから、ヴェニスの氣候は如何かと、聊か氣懸りであつた。

□日本に居ても寒いのは餘り感心はしないが、西洋の旅の寒いのは、一層閉口す

る。單に見物だけなら、それ程に困却しないが、寫生の時には全く降参する。西洋では往來到る處敷石であるから、靴は氷の様に冷え、膝から腰にかけては感覺のなくなる程冷めなくなる。宿に歸つても急に火を貰へぬ事があるが、そんな時は何時も日本の自由な事を思ひ出して

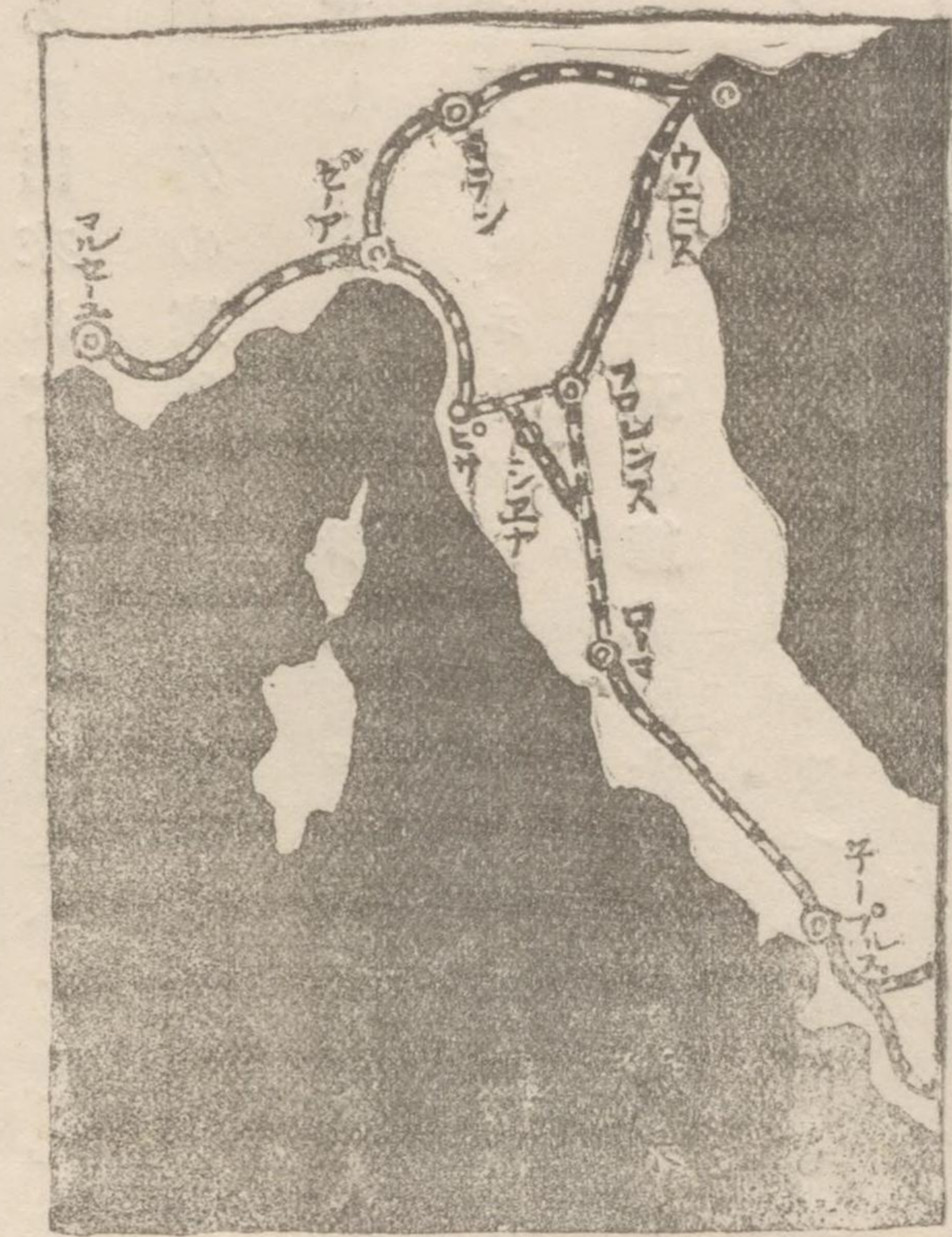


圖 七 十 第

懐しくなる。併し伊太利の汽車は何れも室が暖いから、これは何より助かる。夜汽車でも外套脱いで少しも差支無い程の温度になつてゐる。  
□ネーブルスからヴェニス迄は約十九時間である。夕の六時五十分

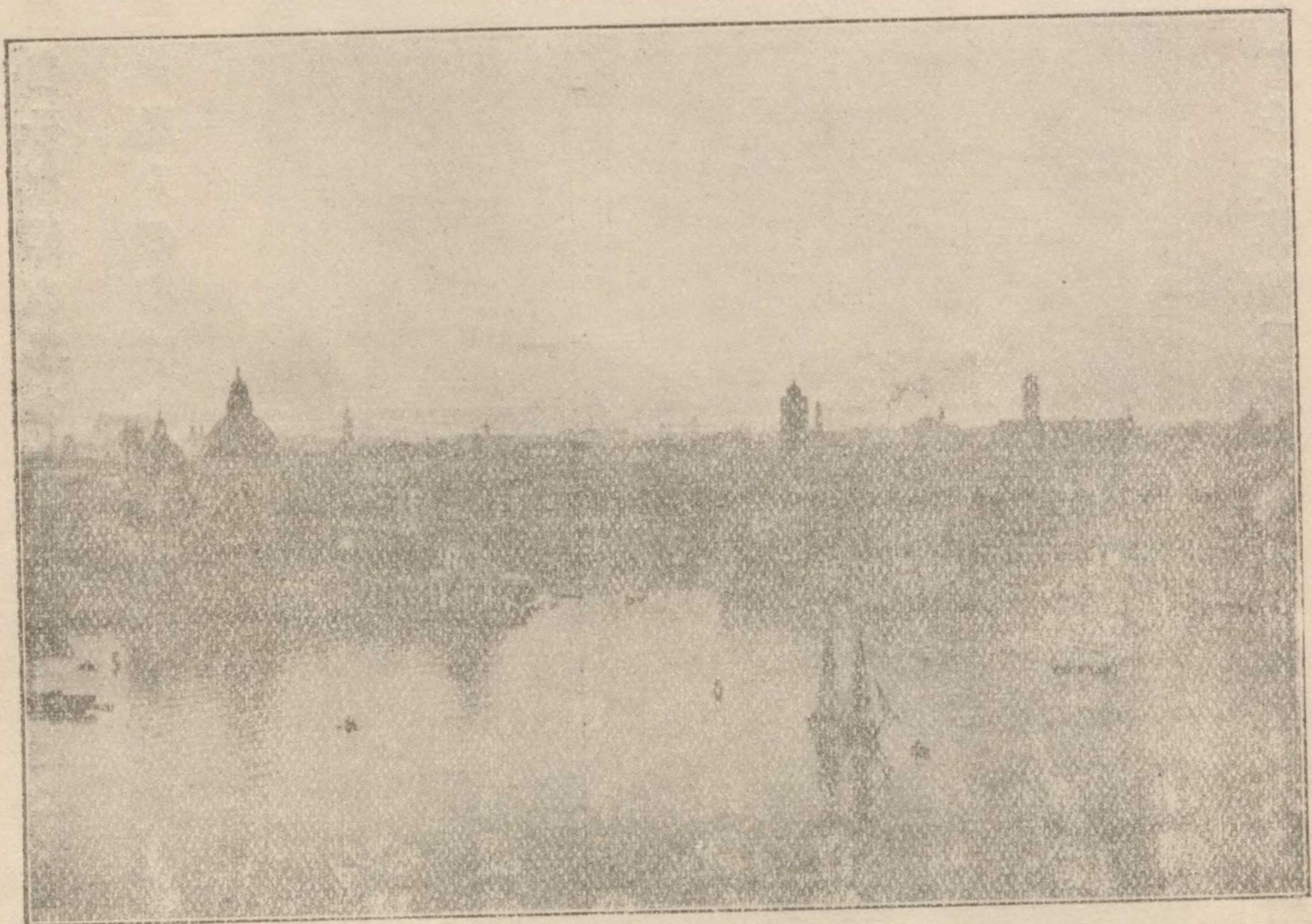
發車して、その夜の十二時にローマに着く。そこでローマ、ミラン行の列車に乗換て直ぐに發車し、朝六時フロレンスに着く。汽車に乗つた儘ボロニア迄行き、十時



半頃又其處で乗換をやつて、午後一時五十分ヴェニスに着く。此途中ボロニア附近の山景は東海道小山山北間のやうな風景で、山にも村にも雪が一面かかつてゐた。出来れば下車して見たいと思つた處も諸所にあつた。

□窓外の寒氣は中々に激しい。ネーブルスを立つ時驚いたのは、汽車賃の割引の甚しい事で、總て伊太利では長距離だけその割引は多い。今各地の汽車賃を掲げて見ると、ネーブルス。ローマ間十三法。ローマ。フロレンス間十四法。フロレンス。ヴェニス間十五法。總計四十二法だが、ネーブルスからヴェニス間の直通切符を買ふと僅に二十三法八十文である。而も其期日は八日間であるから、短時日の見物は非常な便利である。

□一月十四日午後一時五十分、ヴェニスに安着した。ヴェニスは海中の町と聞いて居たが、今來て見れば、本州より五千メートルも離れた海中に築かれてあるので、云はゞ品川の臺場を大きい町にした様なものだ。

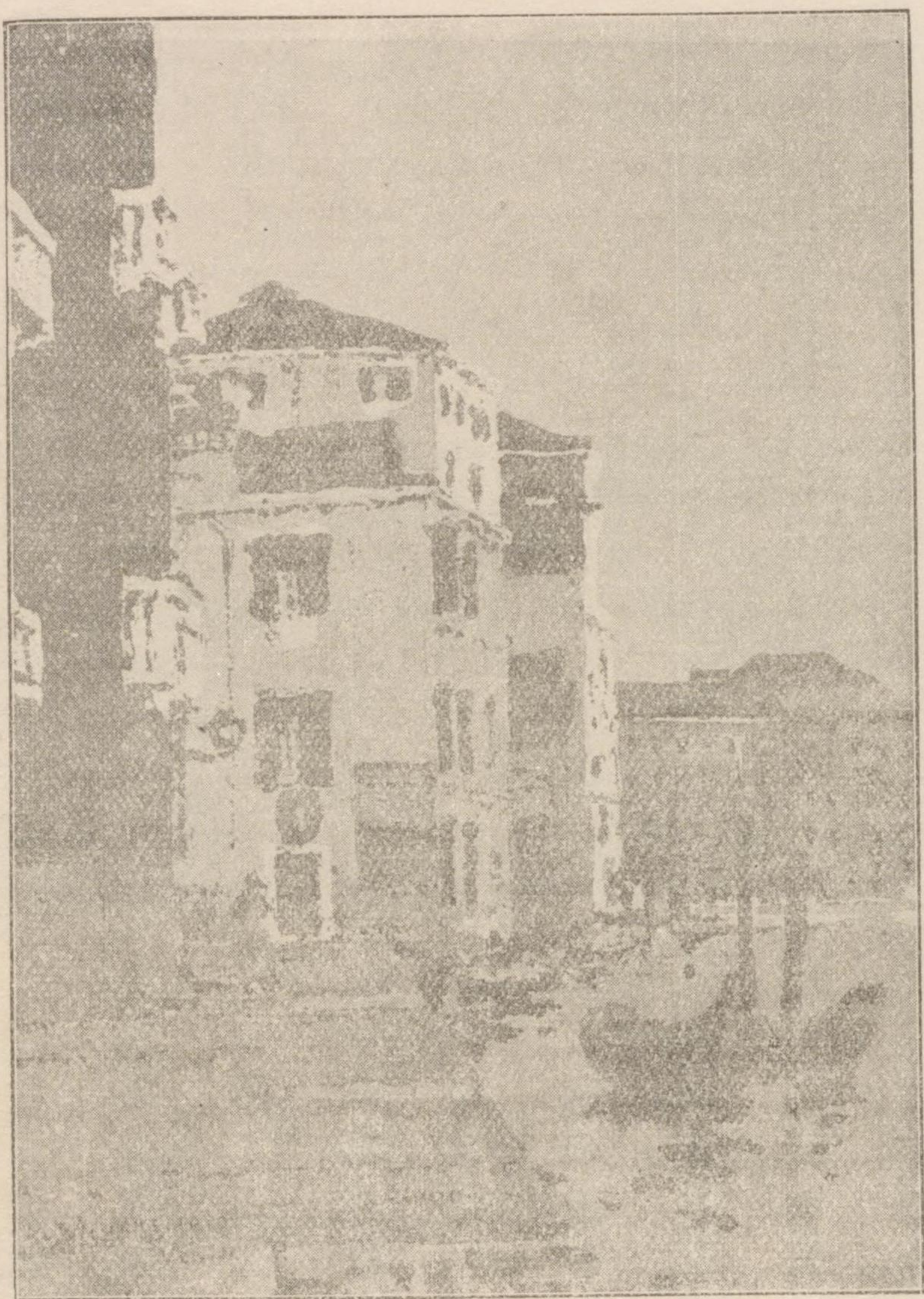


景 全 の ス ニ エ ヴ

□停車場に着いて先づ異様に感じたのは、四邊が極めて静な事だ。停車場の前は直ぐに掘割で、馬車は勿論車と云ふものが一臺もない。成程繪や寫真や又人の話で嘗て承知してゐたゴンドラが、丁度おたまじやくし蛸斗の様に、掘割の邊にうちや付いてゐる。直ぐに馬車なり電車なりで、思ふ宿に行くと云ふのが、他の都會での順序であるが、こゝでは、何所に行くにもゴンドラか、又巡廻船で、堀割を奔らねばならぬ。



□自分は停車場の向河岸の宿屋に投宿した。茲も亦獨逸人の宿であつたが、概して獨逸人の宿は、萬事が清潔で、規律も正しく、不正な事も無いから、不案内の我々



ス ニ エ ヅ

には至極安心である。此宿では一日のパンシヨン八法でこれは餘り安い方では無い。□ヴェニスに來て特に眼に新らしく感じたのは、色彩の強烈なる事である。これは建築が皆彩色されてあ

るから、緑の屋根のサン、シメオン寺。殆ど純白と見ゆる大理石造のバラツツオ、

デユカレ。精巧なるモザイクで覆はれてゐるサン、マルコ。其他赤壁の家屋、黄色の戸。緑色の窓。殆ど繪具の都と云ふて差支へ無い。況して連日の晴天、空は透明した濃い空色で、中々日本晴も及ばぬ青天。それにヴェニスの水は、何所を見ても特別に美しい緑色をしてゐるので、



割 堀 の ス ニ エ ヅ

別は又不思議に思つた。

□一月中旬のヴェニスは中々に寒い。アドリアチックから吹いて來る風は、顔を切る様であつた。早朝寫生をして繪具の凍つた事もあつた。兎

に角市街の景色は、何所を見ても熱色で、如何にも夏らしいが、其實寒氣は身を裂く様である。眼の感と身體の感の大相違は誠に變な氣持のものである事を経験した寫生に行つて歸途何處を通つても、眞に車の影は見なかつた。又馬の姿も一



度も見懸けた事が無かつた。

□ヴェニスにゴンドラは一種悲愴の感がある。船體も黒ければ又其屋根も黒い。又其上を覆ふてゐる天鵝絨の布も黒い。總てが黒色づくめであるから、葬式の棺の様な感がある。若しその中に美人でも這入つて居れば、尙ほ一層物凄しい。併し其外見と云ひ又乗つた時の氣持と云ひ、これは到底馬車や自動車に乗つた時の氣持では無い。其優長な事はどうしても歐羅巴のものとは思へぬ。着いた翌日の一月十五日は、舊曆の幾日に當るか、丁度その夜が満月で、グラントカナルの月夜の光景は、繪に描く事も出来ぬ程の美しいものであつた。

□ヴェニスに見物する處は中々多い。有名なサンマルコの寺及び市長宮から、アカデミアの畫堂を初めとして、詳しく廻れば際限が無いが、是等特別の觀覽を除いても、ヴェニス市その物が既に大美術館であるから一向飽きが來ない。

□自分はヴェニスに來ても市街の様子が愉快なので、船に乗り或は狭い裏町を

縫つて歩るいて、一向美術館や寺參りをする氣が起らなかつた。ピアツエッタ、サンマルコの橋から一錢蒸汽で、リドの島に渡る。此間の景色は河村清雄氏の油繪



場 市 スニエザ

を見る様で、此様な所に住む事が出來たら、畫家としてこれより以上の幸福は無からうと思つた。

□商賣柄先づアカデミアの畫堂を見物した。こゝには多くヴェニス派の繪が陳列されてある。無論古畫許りで、新作は無い、何れも立派な繪ばかりだ。就中、チシアン、ヴェロネス、チントレット、リベラ、ヴァンダイク等

の作にも佳作が多い。この美術館の外にギャラリー、インタルナチヨナーレ、ダルテ、



モデルナと云ふ新作品の畫堂がある。これは千九百二年に初めて開館したので伊太利現代畫家の作と、又外國人の作畫を多く集めてある。

□外國人の繪や彫刻は、博覽會其他の展覽會で購買したものだと云ふが、自分は此畫堂を見物して急に自分等の進むべき道が開いた様に思つた。畢竟昔の繪のみを見て居た矢先に、色の明るいものを見た所爲であらう。

□新作畫の内、尤も面白く思つたのは英國、佛國、白耳義邊の作家の傑作であつた。成程一々其人の佳作に相違無い。此處には日本畫も二三枚陳列となつて居た。松年の鷺、江亭の鶉、月耕の祭禮、寛畝の雉などである。其内一枚の横繪が縦圖となつて掛つて居た。又此所で特に深く感じたのは、新作畫のうち光彩を放つてゐるは、皆外國人の作畫で、伊太利人の作品の著しく劣つてゐる事である。ロダンの作「カレ」市民の銅像は茲で初めて其現物を見た。

□バラツツオ、ドニカレのチントレットの天井繪と、壁畫は、羅馬ヴラチカンのシ



ル ナ カ、ド ン ラ グ

スチン禮拜堂のそれと比すべきものと思ふ。説明の下圖を持つて、一々天井繪と比べては觀覽する。首筋も痛くなつて了ふ。其他サンマルコの寺のモザイク、ポントリアルト橋の風雅なる。何所も皆夢中で見物して了ふた。

□ある日アカデミヤの前でグランド、カナルの寫生をやつて居ると、急に後方から自分の名を呼ぶ者があつた。意外に思つてふりむくと、巴里の和田三造君だ。

□先方でも驚き此方では尙ほ更に驚いた。君は數日前巴里を出發して、

ミランを経て昨日ヴェニスに來たのだと云ふ。巴里ではルクサンブル公園で邂逅し、今又こんな處で偶然に會ふ。これが本統の腐れ縁だらうと大笑した。一緒



にゴンドラに乗つて、カナルを當も無く乗廻はす。巴里一別以來、和蘭、白耳義、西班牙旅行の次第を話す。君から教へられた西班牙の宿では毎々大失敗をやつたと大に恨を云ふ。

□何を話しても日本語では一向誰れにも解らぬから氣が置けぬ。ゴンドラへも餘り長く乗つたので、少し町を散歩しやうと、ポンテ、リアルトの先の川岸に上る。それから三尺も無からうと思はれる狭い町の繁華な通りをぶら／＼素見しながら、サン、マルコの廣場に出た。終に共に夕食を濟して、又的もなく町を散歩した。

□自分はその夜和田君に別れ、翌日ミラン、ゼノアを経て、マルセーユに向つて立つた。和田君はこれからフロレンスに行つて、南下して徐々にクリース方面へ旅行されるさうである。

### 三度目のマルセーユ

□一月二十八日出帆の丹後丸に乗船するので、その用意等かねて、出帆の四五日前にマルセーユに出て來た。マルセーユはこれで三度目であるから、此處へ出て來れば、何んだか本國へでも歸つた様な氣がする。ヴェニスからミランに出た時は、丁度和蘭のハーレム邊の昔の古い靜かな町から、ロツテルダムに出た時の様な感じがした。ミランの活氣ある整然とした市街には吃驚する。伊太利と云ふよりは、寧ろ新進國の獨逸の都でもある様だ。

□人間の風も一般に變つて、開けた立派な歐羅巴の大都會である。と云ふものゝ自分にはこの開けた都會は餘り珍らしく無く、ミランに來て、既う伊太利で無い様な氣がした諸所の見物で、最早日限が無くなつて了つたので、終にミランを詳しく見物する事が出來ず、漸く大理石の大寺院だけを參拜して立つた。豫て評判は聞いてたが、これは想像よりも、數層立派なもので、内部のステインドグラスには舌を捲いた。



□ミランでは寒氣益々激しく、雪が諸所に残つてゐる。往來は鏡の様に凍つて、馬車などが滑つて轉倒してゐるのを屢々見受けた。ゼノアに来て急に暖くなる。僅の距離でこんなにも氣候が違ふものかと驚いた。ゼノア、マルセーユ間の地中海の沿岸は、今丁度季節で、避寒の客が到る處盛んに詰めかけてゐる。サン、レモから、ニース邊の賑ひは實に非常なものである。芝居の舞臺にでも出て來さうな美しい婦人や小兒連が、赤や白や又水色の日傘を翳して、海岸を逍遙してゐる。オルトラマリン色をした地中海の海の色が、如何にも好い配合を現はしてゐる。

□こんな景色を眺めながら段々と、マルセーユに接近して行く。ツマリ歐洲旅行の終局が近づいて來た譯だ。既う呑氣な旅の生活が、遠からぬ中に済むのかと思ふと、何んだか、味氣ない、心地になつて來る。併しまだ埃及の旅行が残つてゐるから、幾分か楽しみが無いでもない。

□マルセーユに着いて、豫て打合せのアデンスの久米氏の宿に、愈々乗船の事を

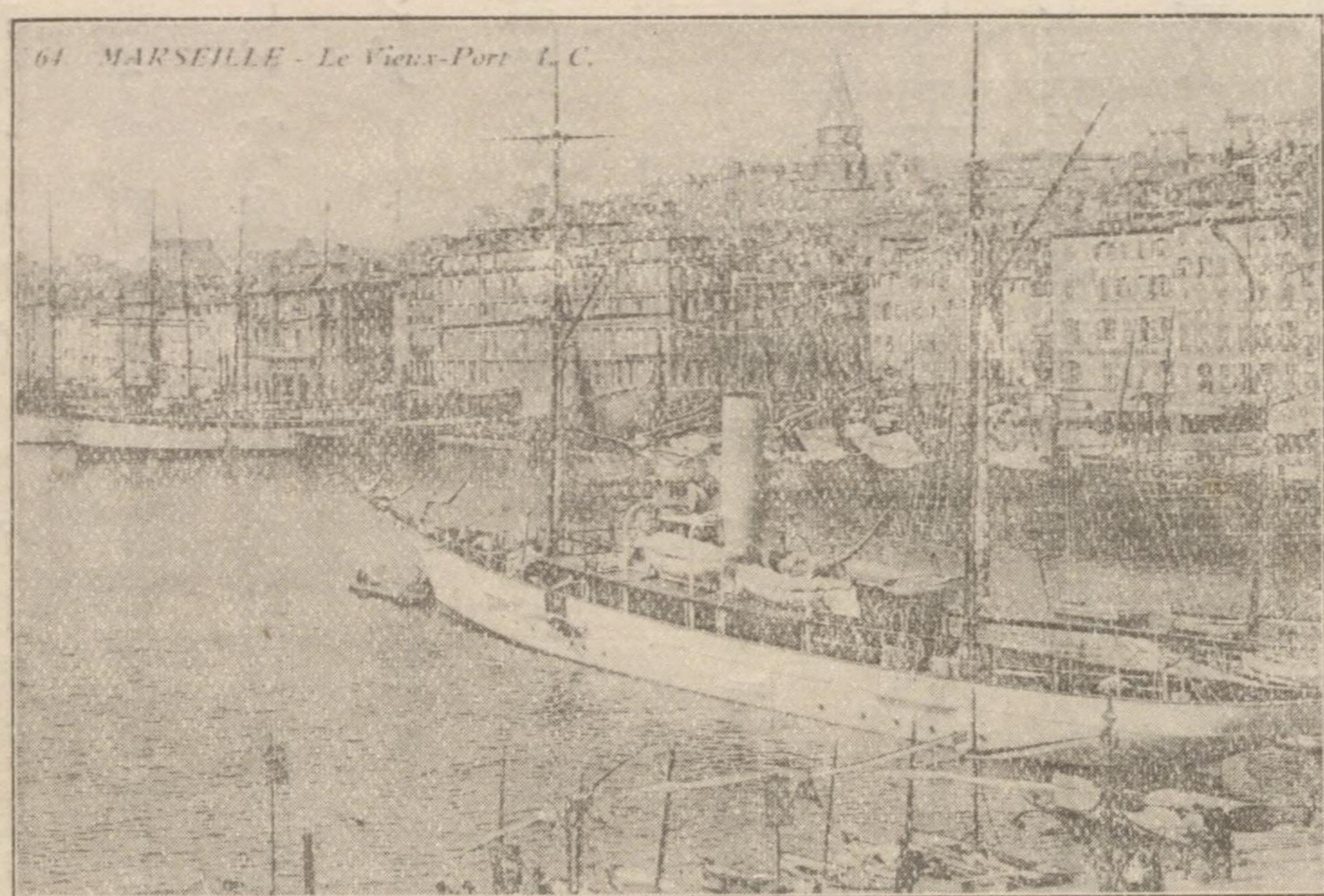
打電する。直ぐに、此方も豫定通り立つと云ふ。返電が來る。地を隔つる幾百里でも、斯う物事がキチンと運ぶと實に面白い。乗船の前、又一通り、マルセーユを見物もし、又寫生をもした。昨年日本から來た時、其建築の壯觀に驚いた。バレー、ロンシャン、ノートルダムが、何だか少し見すばらしい様に見えた。これは伊太利各地の建築を見て來たからであらう。

### マルセーユ出帆

□二十八日の午後四時、丹後丸はマルセーユを出帆した。自分はその午後に乗船した。急に日本人の群に這入つたので、自分が俄に眞人間になつた様に覺えた。西洋人の中にはばかり居ると、第一背は低くし、顔色は悪るし、何かにつけて何時も引けをとつてゐるが、既う此船に來てはそんな心配は無い。奈何なハイカラ振つた人々でも、當港で日本船に乗り込むだ時の氣持を、悪るいと偽る人はなからう。久



し振りて日の丸の旗を見た時は、決して悪い心地のするものでない。



港 の ユ ー セ ル マ

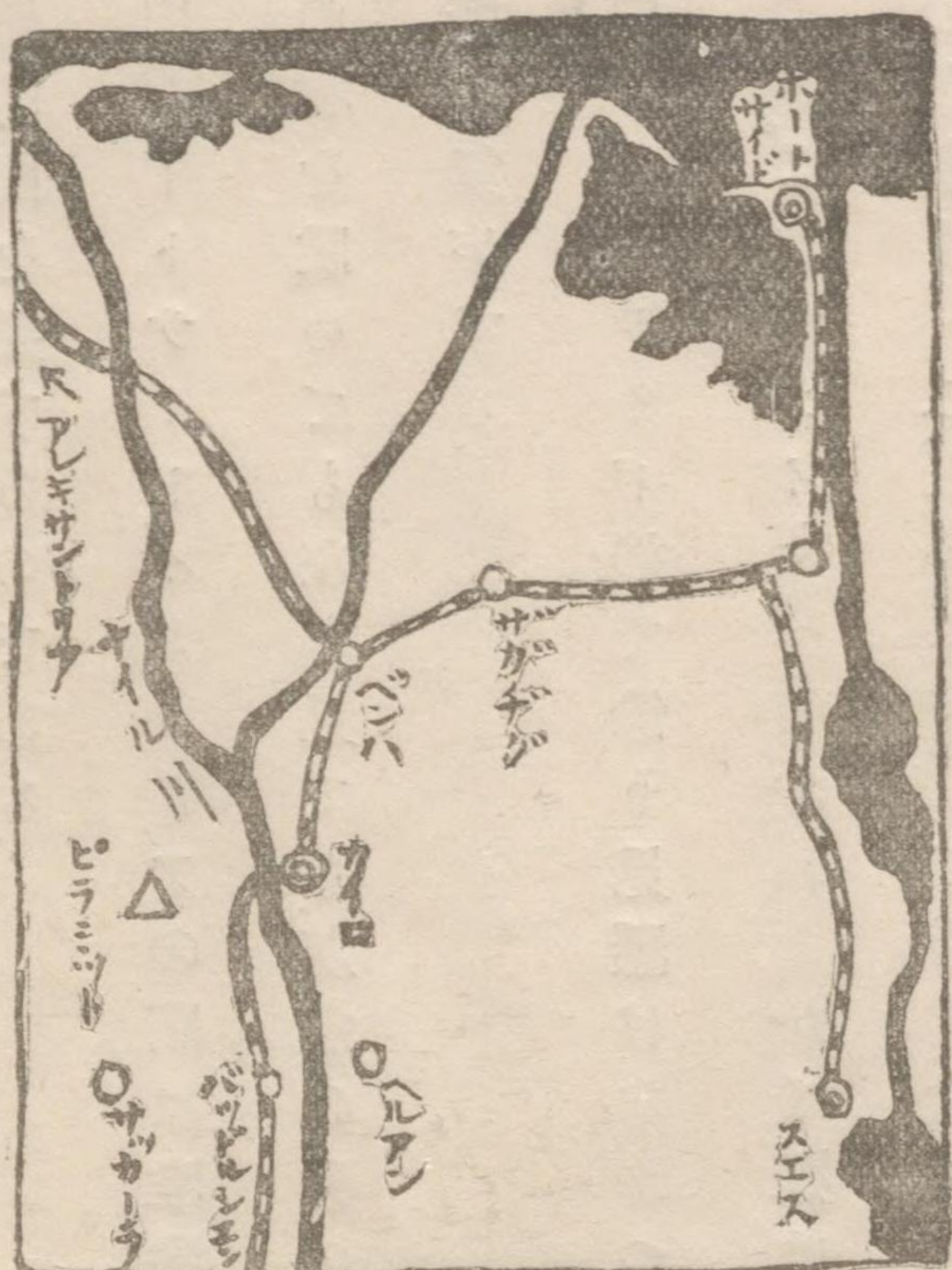
□ マルセーユを出帆して、ポルトサイドに着く七日間は、別に何事も無かつた。唯昨年此同じ航路を通つて、マルセーユに行つた其時の事など考へ出して、當時同船の諸君などは、今頃日本で奈何暮して居られるだらうかなどと、色々な事を想ふた。マルセーユから往航で同室となつた、日英博覽會出品協會の武野君と又偶然一緒になる。

( 〇二三 )

### ポ ー ト サ イ ド よ り カ イ ロ

□ 二月三日、豫定の通りポルトサイドに着

今日こそは、愈々カイロに行つて、豫定通り久米氏に會合する事が出来るのだと思へば、中々安閑と朝食などをして澄しては居られぬ。且つは汽車の發車時間も



第 十 八 圖

一日二回で、若し朝の八時に乗遅れば、午後一時迄待たなければならぬ。そこで起きるや否や、直ぐに荷物を調べ、上陸した。荷物はこれをカイロ迄持つて行つては、非常の手数だから、其儘税關に預けた。税關に預ければ一日一個に付き、ニピヤストル。即

( 一 二 三 )

ち十錢を拂へば可いのである。萬事萬端是等の周旋は、クック社の世話人に依頼して、直ぐに停車場に駆け付けた。

□ 汽車は今丁度發車する處であつた。ポルトサイドからカイロ迄百五十哩。新橋



から遠州大井川邊迄と同じだ。地圖で見ても、ポルトサイド。カイロ間は東京と横濱間の如く思はれるが、中々さうでない。汽車はスエズ運河に沿ふて、イスマリヤ迄奔り、それから右折して、ザガチック。ベンハ驛を経て、カイロに着く。此間急行で四時間を要するのである。

□ポルトサイド。イスマリアの間は、唯渺茫たる砂漠で、樹木も其邊には餘り見えぬ。右を眺めても左を見ても、灰色の砂のみで、段々砂漠の奥へ奥へと這入り込む様な氣がする。

□ポルトサイド邊で餘り見懸けなかつた、亞弗利加の土人が追々に多くなつてくる。これでカイロへ行かれるかと疑はれる許りである。ポルトサイド。カイロ間の汽車は、一、二、三等に別れて居る。歐米人の旅客は一等に乗る事に極つて居る。二等へは餘程儉約の歐洲人か、又亞刺比亞人の少し氣の利いた者が乗る。三等には全く亞刺比亞及び埃及の土人が乗車する。其車中の光景は、日本から直接に來た

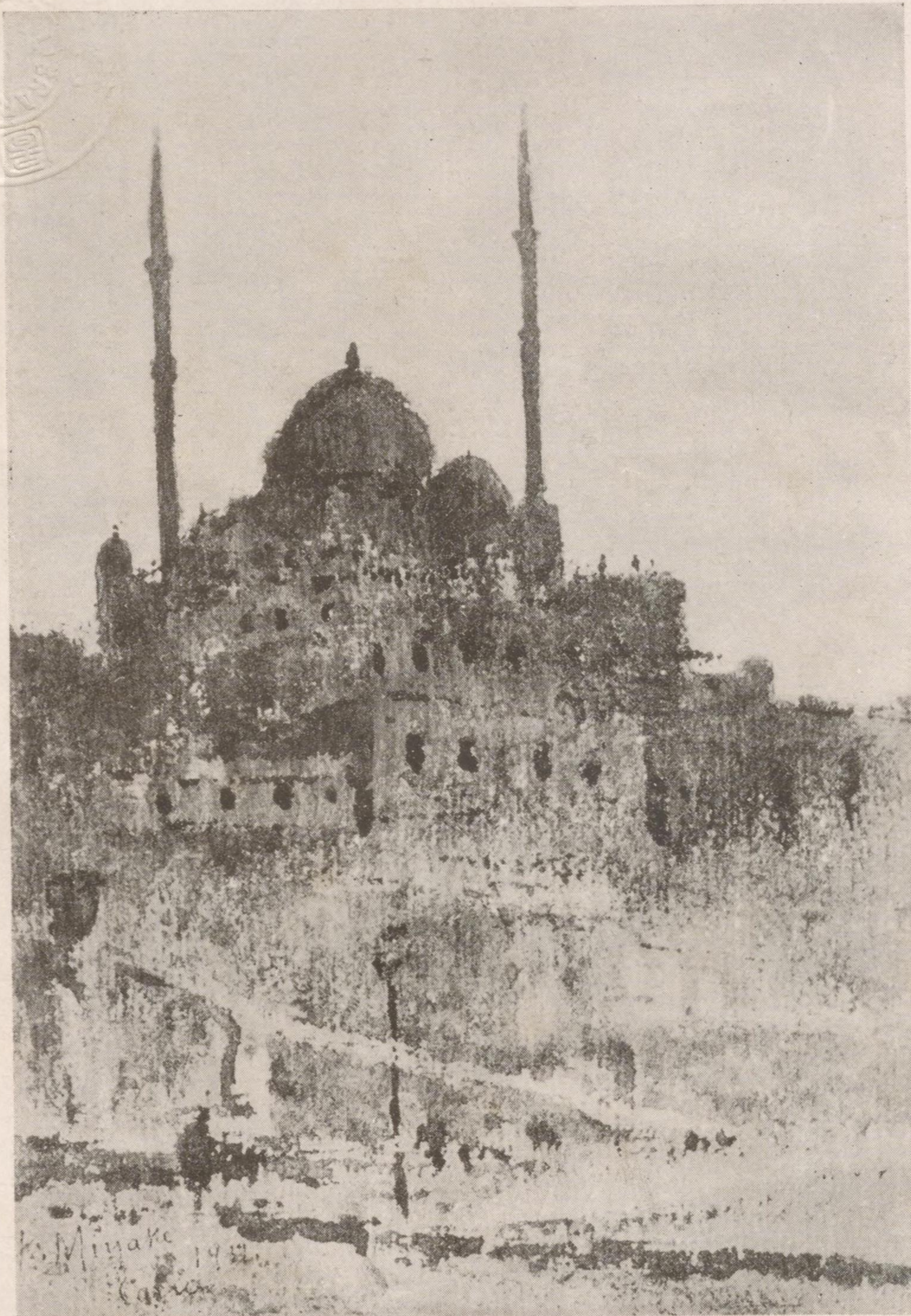
許りの人々は覗いた計りで驚くであらう。

□頭に白布を捲き付けて、汚れた長い黒服を着た裸足の男も居れば、又鼻の先に眞鍮をぶら下げた異様の婦人も居る。さうして其不潔な事は動物を入れてある檻の様な感がある。如何に自分が物好きでも、此連中の中間入は出來ず、此處では終に二等列車に乗り込んだ。

□二等列車は英國風の中々洒落たものだ。各室の一方が長い廊架になつて居て、構造から云つたら場所柄として申分は無からうが、唯砂漠の中を往來するので、室が汚れるのと、乗客が乗客だけに、自然野蠻に流れてゐる。

□汽車の係員は、皆土耳其古帽を被つた眞つ黒な亞刺比亞人で、停車場に着いても何所に行つても、この亞刺比亞人ばかりだから、最初は萬事信用する事が出來ず、誰を見ても、ポルトサイド邊にしろ付いてゐる無頼漢の様に思はれた。何れにしても、全く單獨で斯んな汽車旅行をするのは、愉快と云ふ内にも、幾分か不安の念





埃及カイファ市ホメソニア回教寺院

脚 行 給 洲 歐

が加はるのは免れない。

□イスメリアを發車して四十哩餘でザガヂックと云ふ町に着く。此邊に来るとポルトサイド。イスメリア間の光景とは全く變つて、緑の畑もあれば、椰子の林もあり、又埃及名物の蠶豆畑からまなどが一面にあつて、百姓は彼方此方で耕作に従事してゐる。埃及にもこれ程豊饒な土地があるかと吃驚する。畑地の中には縦横に細い堀割があつて、百姓共は絶えず堀割から水を畑に注いでゐる。

□裸體の土人が水牛と一緒に畑の畔道など通つてゐる。自分はポルトサイド以來まだ一杯のカヒーも飲まぬので、咽喉は渴する、腹は減る。停車場で何か食物はないかと探したが、別にこれと云ふ物も無く、胡麻入りのパンと茹玉子ウヂと、怪しいラムネ位のものだ。同室の獨逸人も窮したと見えて、そのパンと玉子を買つて食つたから、自分も亦これを真似た。



### 久米氏にカイロにて

久米氏にカイロにて

□午後一時漸くカイロに着く。豫てポートサイド出發の時、久米氏の投宿されたと云ふ。ホテル、プリストルに打電したので、宿の者は列車迄迎へに来てくれた。

□自分は宿の者に案内されて、宿の馬車に乗つた。停車場前の混雑は實に一通りでない。安宿の客引案内者、其他無數の土人は、今到着した旅客を包圍攻撃して居る。其雑沓と云ひ、喧騒と云ひ、何とも譬様がなく、到底ネーブルスなどの算段で無い。プリストルの宿馬車は、夫等戦場の様な雑踏中を通り抜けて、エスベキア公園前なる宿に着いた。聞けば久米氏は昨夕安着の由で、今食堂に居られると云ふ。自分も非常な空腹の際故、早速に食堂に出かけた。茲に目出度久米氏と會合して、一緒に埃及に於ける最初の食卓に就いた。

□其日の午後は、疲れた身體をも厭はず、早速にギゼのピラミッドに見物に出懸



けた。ピラミッドは、カイロ市を隔つる七哩餘。電車で奔つても四十分間を要する。電車はナイル河を渡つて進む。途中の風光一々活ける繪であつた。



ド ツ ミ ラ ピ の ゼ ギ

外套は放なせぬ。ピラミッド附近の見物に、時の過ぎたのも氣附かぬ内、早や太陽

□ピラミッドの附近は、割合に俗地である。其五月蠅い事も亦何とも話しにならぬ。實地を知らぬ者は到底想像の爲様も無い。久米氏は寫真器を携へ彼方此方を撮影する。

□案内者はまるで蠅の様に追つても追つても我々の周囲を離れぬ。仕舞に餘り忍耐力の強いに呆れ返つて、久米氏と二人顔を見合せて笑つた。案内者も共に愛嬌笑を爲して、毫も怒る様な氣色は無い。

□有繫の埃及も、二月上旬の朝夕は中々に寒いから、

は西に落ちやうとして、強烈なカドミュームの光線を、今ツのピラミッドに浴せかけてゐる。空は愈々青く地は益々赤い。優長な歩調を取つて彼方に歩く駱駝は、その大きな風景によく調和して、天地の悠遠を暗示して居る様に思はれる。自分には計らずも此の光景を見て、暫時恍惚として、傍に久米氏の居るのも打忘れてた。

□ホテル、ブリストルは中々に繁盛な宿で、英佛獨の旅客で充滿して居る。日本人も時々来て、宿泊する者があるさうで、我々二人共に親切な待遇を受けた。室は久米氏と同室。夜は毛布を要する程の寒氣であるに不拘、毎夜蚊帳の必要がある。夜は自分は先に寝に付く。久米氏は何時も明日見物の下調べの爲、遅くまで起きて居られる。

□着いた翌日は午前カイロの博物館に行つた。豫て同館の噂は聞いてゐたが、これ程立派なものとは思はなかつた。大英國博物館の埃及陳列室の外、多くを見た



事の無い自分に取つては、何れからどれを見ればよいのか、其見物に迷ふ程であ



彫浮の板しれさ出掘り、墓のシウガ

る。館は下と二階に別れて陳列されて居る。先づ前廊 (Portico) に二個の花崗岩のスフィンクスや、又二個の巨大な像がある。一ツはアメンホテプ他はラムセス二世である。

□ 其他メムピス、ギゼ、アピドス邊から發掘された王の石碑及びアラバスターで造つた供物に用ゐられたテーブル。こんな工合に書き列べては際限が無いが、自分の尤も面白く感じたのは、メムピス時代の最も古き墓の一つと云ふ、サツカラ

のオウシの墓から掘出された、板の浮彫であつた。

此等の作は大ピラミッド以前の物で、第三王朝即ち紀元前四千四百五十年から、四千二百四十年間のものだ。又サツカラから



ライミの世ニスセムラ

出た花崗石の書記の像、これも第五王朝のものだ。其他村長だと云はれてゐる木彫の立像、又ルクソール、カルナックから發見された、アメノフェイス第三世の妻、女王タイの花崗石の首、其他ラムセス二世を初め、歴代王のミイラ、四五千年前の人間の死體が、その儘保存され、鼻や耳は勿論、眉から睫毛迄が、明白に認められる。此博物館内に居ると、自づから永遠の念を起さしめて、人生僅か五十年で、齷齪

として朽ち果てるのが、如何にも馬鹿氣たように感ずる。



サツカーラ見物



首のイヌ女王

□一日サツカーラに見物に行く目的で、前日から辨當の用意を命じ、早朝カイロを立つた。カイロから約一時間で、バツドルシエイン驛に下車した。この向うにナイル河を隔て、ヘルアンの町が見える。ヘルアンには温泉などがあるさうで、可なりな町

である。バツドルシエイン驛からサツカーラへは、二里もあらうか。停車場に着くと其處には驢馬が澤山客待をしてゐる。此處から驢馬に乗つて一時間半位でサツカーラに行かれる。カイロからヘルアンに行き、ナイル河を越えてサツカーラ

見物をする人もある。ヘルアンからサツカラ迄二時間半を要する。

□乃で我々は、停車場で案内旁々驢馬を雇つて銘々馬に乗る。自分等まだ馬と云ふものに乗つた経験が無いから、一端は聊か氣遣をしたが、勇氣を振つて意氣揚々と跨かつた。

□我々の驢馬は、停車場を發して、バツドルシエインの村を通過して、サツカラ街道を進む。バツドルシエインの村は、土人の住んでる寒村で、奈何見ても埃及の内地とより思へぬ。家は多く乾燥煉瓦で積上げて、家の後園には椰子の林が茂り、又家の前には、沼澤などがあり、其處には家鴨が飼つてある。又駱駝は到る處の往來に佇立して居る。

□此村で不思議に思つた事は、各家の屋根は、丁度日本の物置になつて居て、何んでも其所に置いてある。鶏を飼ふのも、犬を飼ふのも、皆屋根の上だ。これは單に此村ばかりでは無い。埃及は一般に皆此風がある。我々がバツドルシエインの村を





氏米久の影撮にて近附ソイエシルドツバ

どが轉がつてる。

通過する時、狭る村道を無数の駱駝の隊が通過するに出逢ふた。駱駝は皆石を背に負ふてゐた。久米氏は先に行かれる。さうして駱駝と駱駝の間に狭まれて、負ふ

てる背の石が、久米氏の外套の背に時々觸れる。これを後から見えてゐる心配と云ふものは一通り、でなかつた。

□その内に漸く大通に出て、駱駝を一々追ひ抜いて、それで一安心をした。パッドルシエインから三四十分許り行くと、一面の椰子の森林に這入る。それを少しゆくと大古のメンピス市の跡に出る。今は荒廢した唯の畑地であるが諸處に大建築物の基石な

□メンフェイスはメナスの王によつて建てられ、第三、第四、第五王朝の間、埃及の首府として榮へ、大宮殿、大殿堂が、偉觀を呈して居たさうであるが、今は殆ど信じられぬ程に滅亡して仕舞た。兎に角數千年前の話だから、唯オーと驚くの外はない。

□サツカーラに行く途中に、第一に眼に付くのは、ラムセス二世の巨大な石像で、これが二つある。共に寺院の入口に建てられたものであるとの事。最初のは花崗石で造つた石像で倒れて居る。長さが、三十呎もあると云ふ。他の者は石灰石で造つて長さ四十二呎。これは塀で圍つてあつて、入場料四ピアスターを拂ふと見物が出来る。又寺院の墓石が少し北の方に見える。

□此處から一時間半許りで階段ピラミッド附近に行かれる。これは第三王朝のゾセル王の墓だ。ギザの大ピラミッドよりは勿論古い。此ピラミッドの少し西南に第五王朝ウナスのピラミッドがある。此邊に来て空腹を覺える事夥しく、ツイ後方のマリエットの家に這入つて、カイロから持つてきた辨當をつかふ。



□マリエットの家とは、佛蘭西の埃及學者のマリエットが三十年も住んだ家である。マリエットは、一千八百五十一年にアピスの墓を発見して、後、埃及政府の考古學協會の會頭になつた有名な人だ。そんな學者の永年住んでた家だから、奈何に立派な家かと想像するが、其實驚くべき粗末な假小屋である。

□熱帯地方の建築の常として、廂が深く土間が廣い。其處に粗末なテーブルや、又荒削の腰掛臺などがある。既に我々より以前に来て辨當を開けてた人々もあつた。カイロの宿から呉れた辨當は、椰子の葉の莖で編んだ籠に這入つて居て、中からは皿も出れば、コップも出る。ナイフ、フォーク、ナブキン迄が出て来る。

□御馳走は唯スープが無い許り。鳥や牛の肉類や、玉子、菓子、菓實それは贅澤なものだ。又飲物には、サイダーの瓶も這入つてゐた。我々の驢馬の馬方は、萬事の世話をして呉れる。我等の食事中、自分もパンを噛じり、又馬には秣を喰はせると云ふので、特別の酒手を貰て、何處にか行つた。

□食後は其家から數間隔たつたセラピウムの墓に行つた。四百ヤードの暗黒な狭い地下道を行く。勿論入口で蠟燭を燈し案内者に導かれて行くのだが、これが中々二人連でも氣味がよくない。中には六七十噸の花崗石の一枚石で刻んだ、同形の棺が、二十四個もある。これもマリエットの發見した最も面白いものの一つだ。

□其他ステツブド、ピラミッドとマリエットの家の間に、プタホテブと云ふ第五王朝の高官の墓や、又タイの墓がある。これも第五王朝のものだ。此内部の壁の浮彫や又其奥の墓は、最も驚くべき卓絶したもので、紀元前四千年前のものだけだ。繪の大部分は明白で、活躍してゐる。是等の作は第五王朝以後の作中での確に佳作であるそうである。

□我々がメンピスの遺跡からサッカーラのピラミッド迄來る途中の愉快は、逆も一生忘れる事が出来ぬと思ふ。天氣は快晴で、暑からず寒からず、畑は麥の緑に





者著影撮てに近附跡遺のスピンメ

彩られて、丁度日本の春である。二人は驢馬に乗つて、堀割に添ふた一直線の道を、心地快い風に吹かれながら通る。土人は馬の傍に来て、懐から古物器を出しては、

安くするから買へと云ふ。試みに言ひ値の一割に付けると、一度は驚いた風をするが、結局その値で賣る。時々駱駝の群に出逢ふ。馬方が面白い英佛混りの片言を云ふて、笑はせる。

□カイロ市には一週間滞在した。回教寺院も、亞刺比亞の博物館、動物園。又亞刺比亞の市場等、晝夜見物に日の短かいのを歎じた。中に最も奇異に感じたのは、回教の大學であつた。數百の生徒が野外の廣場に集まつて、書物を讀むでゐる。さうかと思ふと



町亞比刺亞ロイカ

の如き觀がある。又此大學は、觀覽料を出せば、何處でも案内して呉れる。  
□カイロの市は、到處案内者が居て、驢馬

に乗れと勧める。其五月蠅さ、言語同斷である。一日シタデルを見物に行つた時、其下の廣場には、無數の驢馬が居て、我々見物人を見れば、驢馬に乗れと追つて來る。どうかして追ひ拂はうとしても、直ぐに集つて來る事、實際夏の蠅と違はぬ。



□カイロに来て初めて五月蠅いと云ふ文字の意義を知る事が出来る。久米氏  
とも笑つて話した事だ。二人がうるさい驢馬の爲めに遮きられて、接近する事の出  
來なかつた事が往々あつた。試みに石の階段に昇れば、彼等は、他の道を迂廻して、  
何時の間にか階段の上に来てゐて、我々を待ち受けてゐる。根氣の好いのと、何を  
云つても決して怒らない大度量には唯々敬服の外は無い。

□カイロに居つて最初旅客の何人も異様に感ずるのは、土人の子供等が、バクチ  
ツシと云ふて手を出す事である。これは單にカイロの町のみでは無い。埃及内地  
到る處、バクチツシの聲を聞かぬ事は無い。バクチツシとは心附の金の事だ。だか  
ら驢馬に乗れば、馬丁は必ず定め額の賃銀の外に、バクチツシを呉れと迫る。案内者  
を一人頼むにも、幾何かのバクチツシを要する。是等のバクチツシの意味は英語  
のチップ佛語のブル、ボワーの意味であるけれども、縁もゆかりも無い子供迄が、  
五月蠅く付き纏ふに到つては、殆ど閉口せざるを得ない。



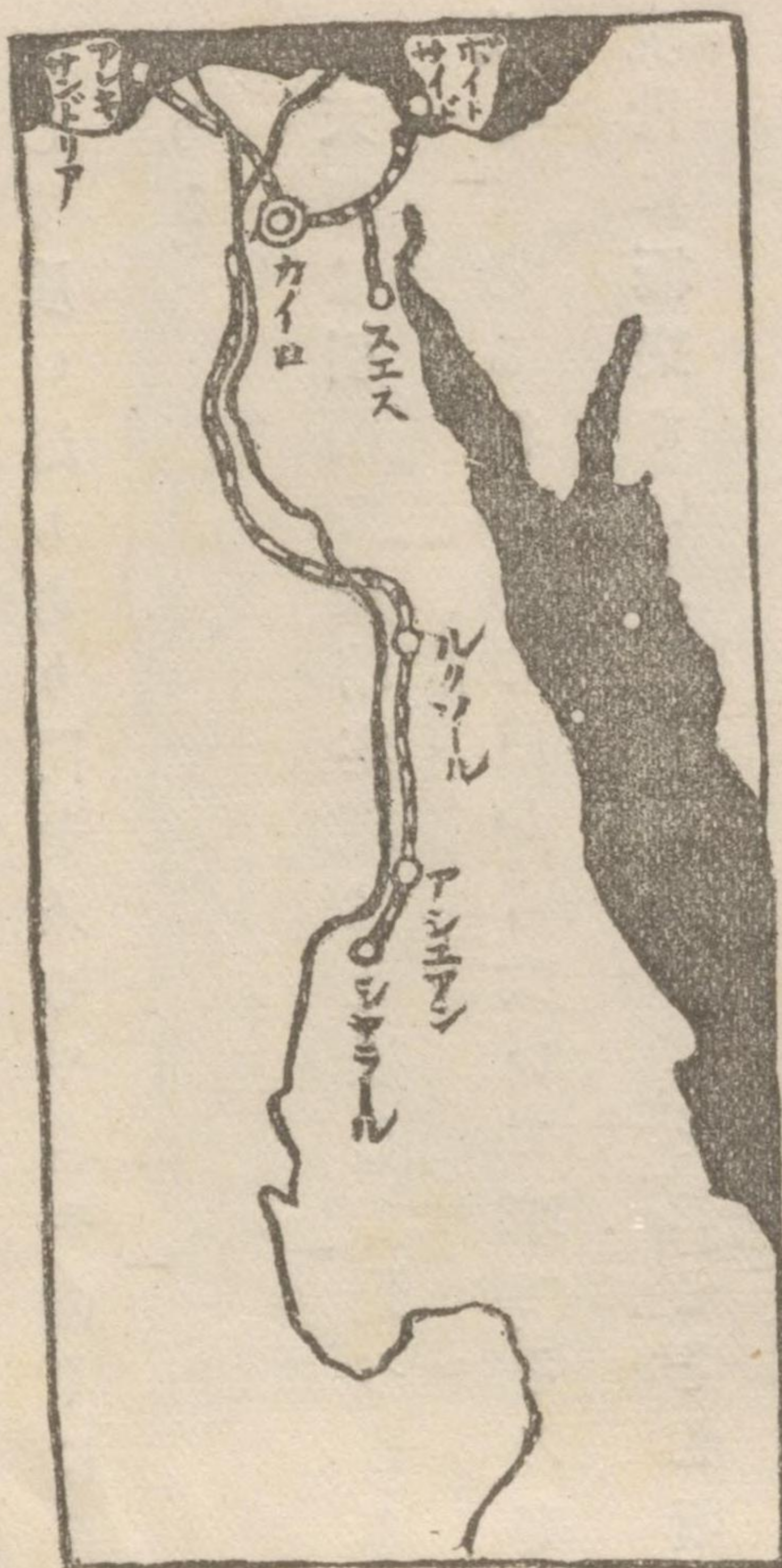
埃及ナイル川





### ルクソールミリアス

二月八日午前八時三十分。カイロを出発して、ルクソールに向ふ。此間約四百二十五哩、夜の十時半頃に着く。列車には食堂車を連結して、便利至れり盡せりである。窓外の風景は埃及である。



第九 文明國と聊も異らない。季節中の埃及内地は、旅客を以て充滿され、旅館の如きも往々満員となり、豫め室の注文を

要するなど云ふ事を聞いても居るし、又案内書にもそう見えるから、ルクソールの旅館に付ては、聊か不安の念があつた。



□然るに實際来て見れば、何の斯る懸念は無用、到る處に數軒の歐風旅館があつて、丁寧親切に待遇して呉れる。特にルクソールのグランドホテルは、ナイル河に面して、廣い庭もあり、門を入るや否や直ぐに百花咲き亂れて、宛も小植物園の觀がある。

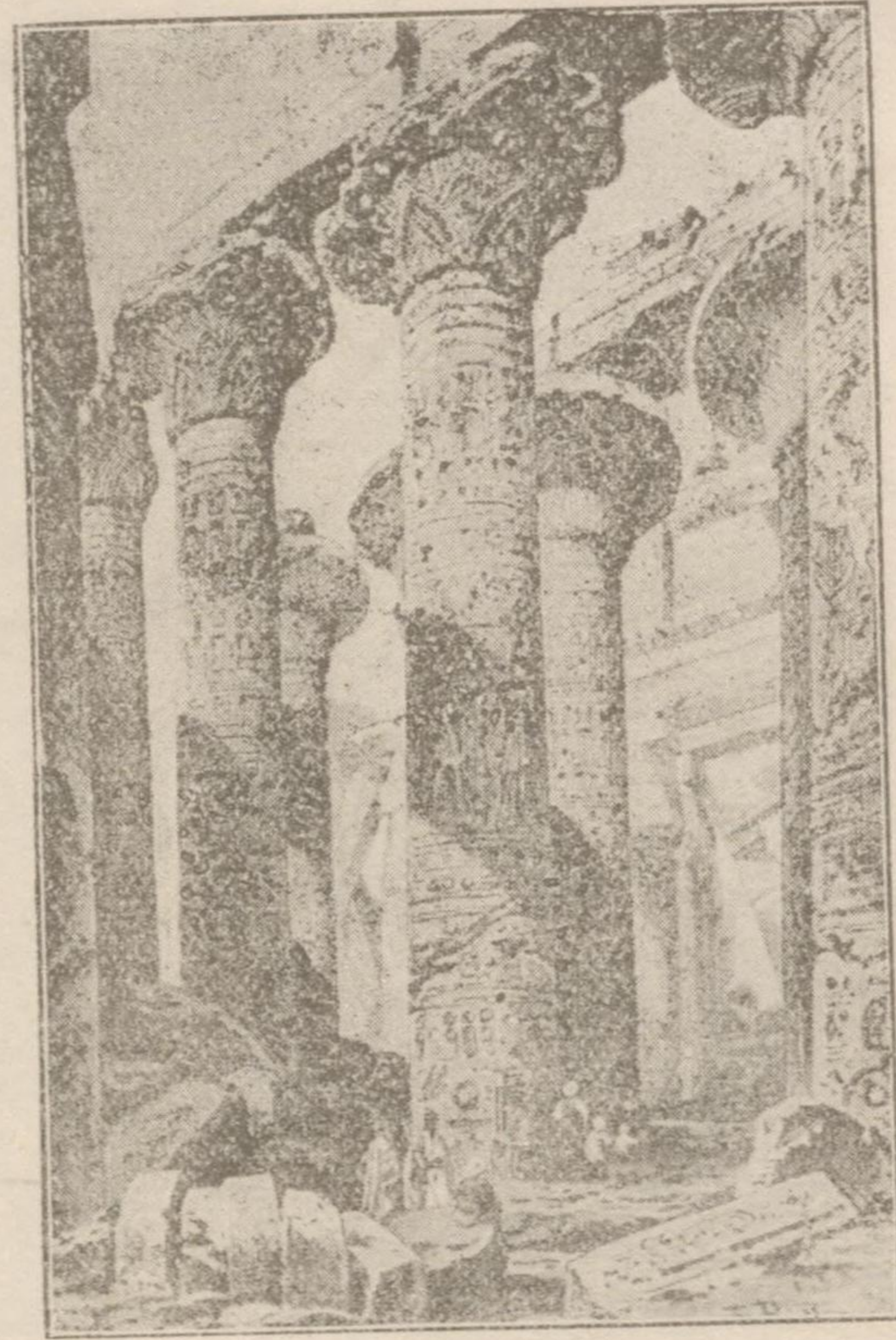
□天氣は引續て快晴、空氣は乾燥して、先づ日本の十一月頃の天候、涼しい風は繁茂してゐる椰子林の間から吹いて来て、その爽快なことは譬んようも無い。若し現世に極樂といふものがあれば、それこそ此頃の埃及の事であらう。

□客は庭園の樹蔭のテーブルで茶を喫む者もあり、又緑の蔭深かき椅子に凭たれて讀書する婦人もある。又門内の花を寫生して居る金満家らしい素人畫家の老人も見うけた。

□着いた翌日早速カルナクツの寺院を見物に行つた。宿から十町餘もあらう。我々はサツカーラで驢馬の快味を知つたので、此處で又驢馬を雇ふた。驢馬の客は

我々の外か英國婦人の團體もあつた。

□道路はまるで火事の燒跡の様な赤い砂で、驢馬の行列が通れば、砂煙で馬の足は見えぬばかりだ。此處でもパクチッシを強請する村の子供等が多い。ルクソールの驢馬は、サツカーラの驢馬より乗心地が悪かつた。急で馳るので、自分の尻は鞍から浮いて、今にも其處へ落ちさうになる。往來には飲けた太い石の丸柱や、又大理石のスクインクスなどがあるので、其處へ



寺のクツナルカ

落馬しては大變だと心配した。

□斯く思つたのは自分ばかりでは無い。久米氏も此處の驢馬は、調子が餘程變つてゐると云はれた。寺の見物を終つて宿に歸り、晝飯後はルクソールの寺を見物



する。カルナツクと云ひ、ルクソールと云ひ、かうも巨大な石材を自由自在に使用して、驚くべき壯大な建築を造つてゐるのは、人間業と云ふより寧ろ一つの奇蹟



寺のルクソール

であると思つた。

□ルクソールの町には古物を賣つてゐる店が澤山ある。又ナイル河を通ふクツク社廻遊船の波止場附近には、露店が一面に到んでゐる。で漫遊旅客と見れば直ぐ呼び止めて、賣り付けたがる。皆各地で發掘した墓か

ら發見したものだと云ふて居るが、無論大部分は贋物である。

□殊にスカラベは贋物が多くて信用して買ふ譯にゆかぬ。其商賣振は、コロンボアの寶石賣りと少しも違はず、何れも云ひ値の一割位に負けるのが普通だ。尤

も皆こんな信用の無い店ばかりでは無い。我々の泊つた宿の隣家に、英人の小さな店が一軒あつたが、其店では一文も負けず、皆正札付であつた。

ルクソールミリアス

□成程品物を見ると、比較的高いが、併し品物は正確なのが、多くあつた。或は夕食後散歩してゐると、『貴君何時こちらへ御出になりました』と日本語で話しかける人がある。こんな處で日本語は意外だから、久米氏と互に顔を見合つて、暫時返事もしず、にゐた話しかけた人は、まだ若い伊太利人で、嘗て横濱に居た事のある人ださうで、ルクソールに可なりの店を持つてゐる商人である。此人の店にも一度素見に出懸けて見た。するとスカラベに就て色々の説明をして呉れて、其本物と贋物とは價が十倍も違ふ。

□此地方に商賣をして居る歐洲人は、多く伊太利人である。皆自國語の外に、亞刺比亞語を合せて四ヶ國語位は自由に話す。彼等は五月には皆引きあげて、其年の秋十月頃に又來るさうだ。歐洲人は到底夏期を内地で越す事は出來ぬと云ふて

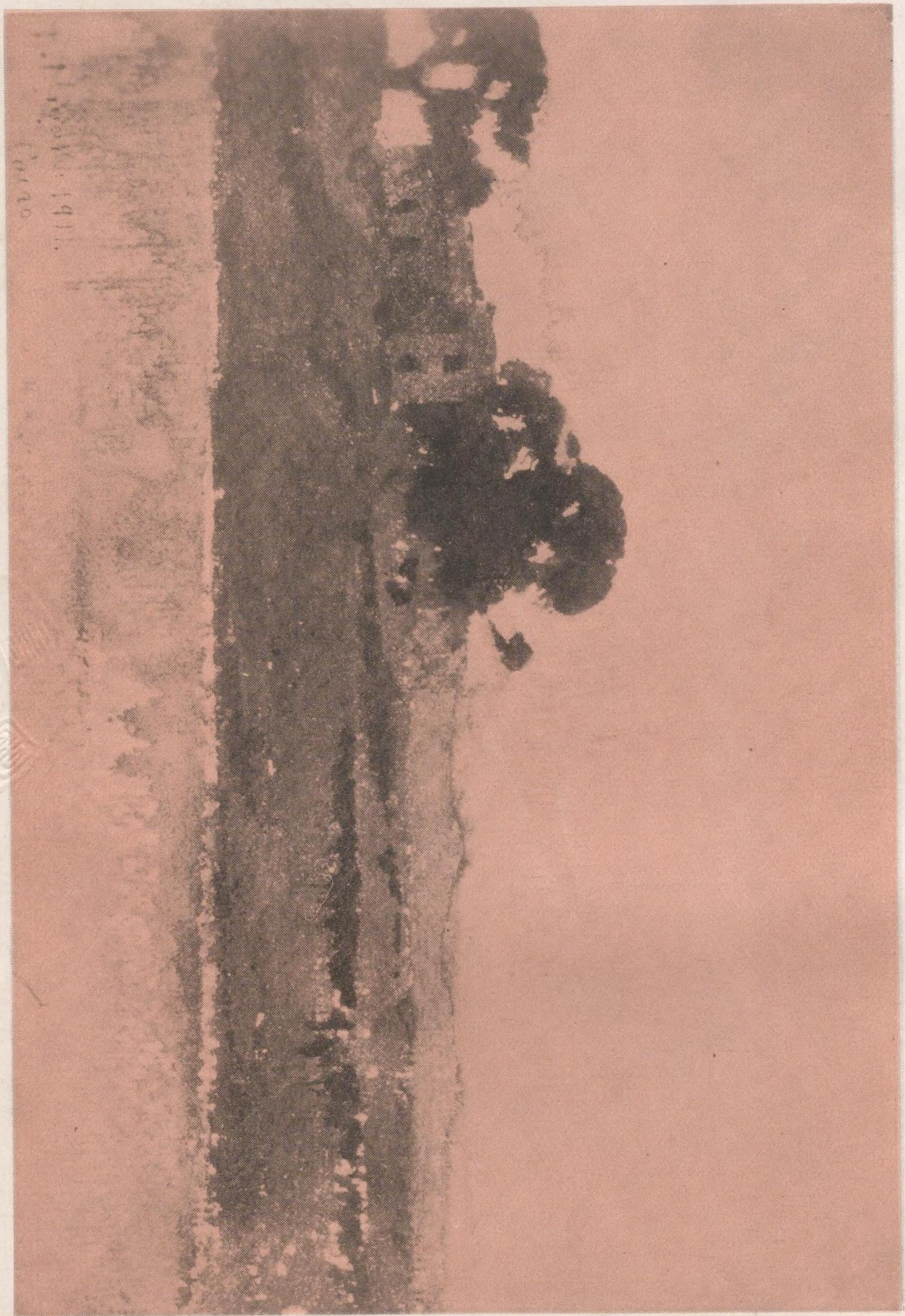


居た。又多くの旅館も夏期は全く休むさうだ。

脚 行 洲 歐

ロルクソール滞在中、久米氏はナイル河の左岸に渡つて、セチ王や女王ハタスやメンツホテプの殿堂等を見物に行かれた。自分はロルクソールの宿に居残つて、附近の寫生をした。此日朝から大風で、黄色の砂が天にも地にも一杯で、まるで黄色の世界を見る様だ。ロルクソールの寫生中、一番困却したのは、蠅の多い事で、五月蠅くて耐らぬ眼と云はず、鼻といはず、口と撰ばず襲來する。椰子の葉で造つた蠅追を土人の子供から買った。すると又他の子供が、土塊の如きものを持つて來て買へどすゝめる。そこでその土を拂つて見ると、一個の燈明壺であつた。又二個他の子供が持つて來た。これは羅馬時代のものらしいが、矢張古色の工合が何とも云へぬ。僅か許りの銀貨でそれを買つた。

ロルクソールには三日間滞在して、アシユアンに向つて出立した。ロルクソールからアシユアンの間、百四十哩。午前九時前に出發して、午後四時半に着いた。アシユ



埃及ナイル川の夕暮



アンは想像したよりも開らけた處で、宛ら東洋の新開地の風がある。ルクソールに比べて稍々俗氣を帯びてゐるのは遺憾であるが、併し評判な所だけに、山あり島あり、樹木が茂つたり何かして、風景の佳いので價值がある。不相變古物屋があつて、夜食後など素見に出懸けた。

□アシユアンから更に一時間ばかりで、シヤラルに行き、渡船して、フイレ島に渡つた。四邊の風光は宛然支那式である。シヤラルはカイロからの鐵道の終點で、此處迄來ると、如何にも埃及内地らしい氣持がする。四邊は寂寥、只土人の聲高な話し聲を聞くのみである。又渡船の中では、船頭が不思議な歌を唄ふ。

□一巡の見物を終つて、九時四十分、又アシユアンに歸り、晝食を喰ふ。午後は對岸のエレフワンチン島に渡つて、發掘の場處など見物する。アシユアンに來て、氣候は大層寒くなつて、日中も外套を離す事が出來ぬ。此曉、清寥たる殘月を眺めて、寂しいアシユアンの宿を出で、停車場に赴いた。



○入口の大戸は未だ開かれず、我々の來たのに氣付いて、鐵道員が漸く門を開く。汽車は五時五十分アシュアンを發車した。

○車内は燈火暗く、自分は八時頃迄何も知らずに熟睡した。途中多摩川向島邊のよな景色を見た。午後一時過ぎ、ルクソールに着く。此所で又カイロ行の列車に乘換へる。夕六時十分發車。停車場の飲食店で辨當の用意を頼み、同時間に乗り込む。乗込の時刻迄は尙數時間の暇があたつので、再びルクソールの各名所を見物し、又古物屋を素見しに歩いた。

○此宵も月は冴えて窓外の景色はまるで晝の様である。三時五分ミニに着く。車中は寒くて眠られず、屢々起きて車内を運動して暖を取つた。午前七時定刻にカイロに着。又ホテル、ブリストルに行く。朝食後再び博物館見物に行く。久米氏は多く撮影する。偶然京都大學の坂口氏と同宿した。

### 加茂丸乗船

○二週間の埃及旅行も無事に終つて、二月十六日午前十一時の列車で、カイロを出發した。愈々明日ポートサイドへ入港の賀茂丸に上船する爲である。

○カイロ發の列車は、午前十一時と午後六時の二回である。午前十一時發は午後三時、ポートサイドに着き、午後六時發の列車は同十一時に着く。我々最初終列車で出發しやうと思つたが、少し早目にポートサイドに出て、其町を見物するも一興と、終に早目に立つた。處が、ポートサイドに着くや否や、明日入港の筈であつた賀茂丸が既に入港してゐる。我々は實に意外であつた。聞けば今夕六時に出帆するであらうとの話。我々は、きはごい處へ來たのであつた。

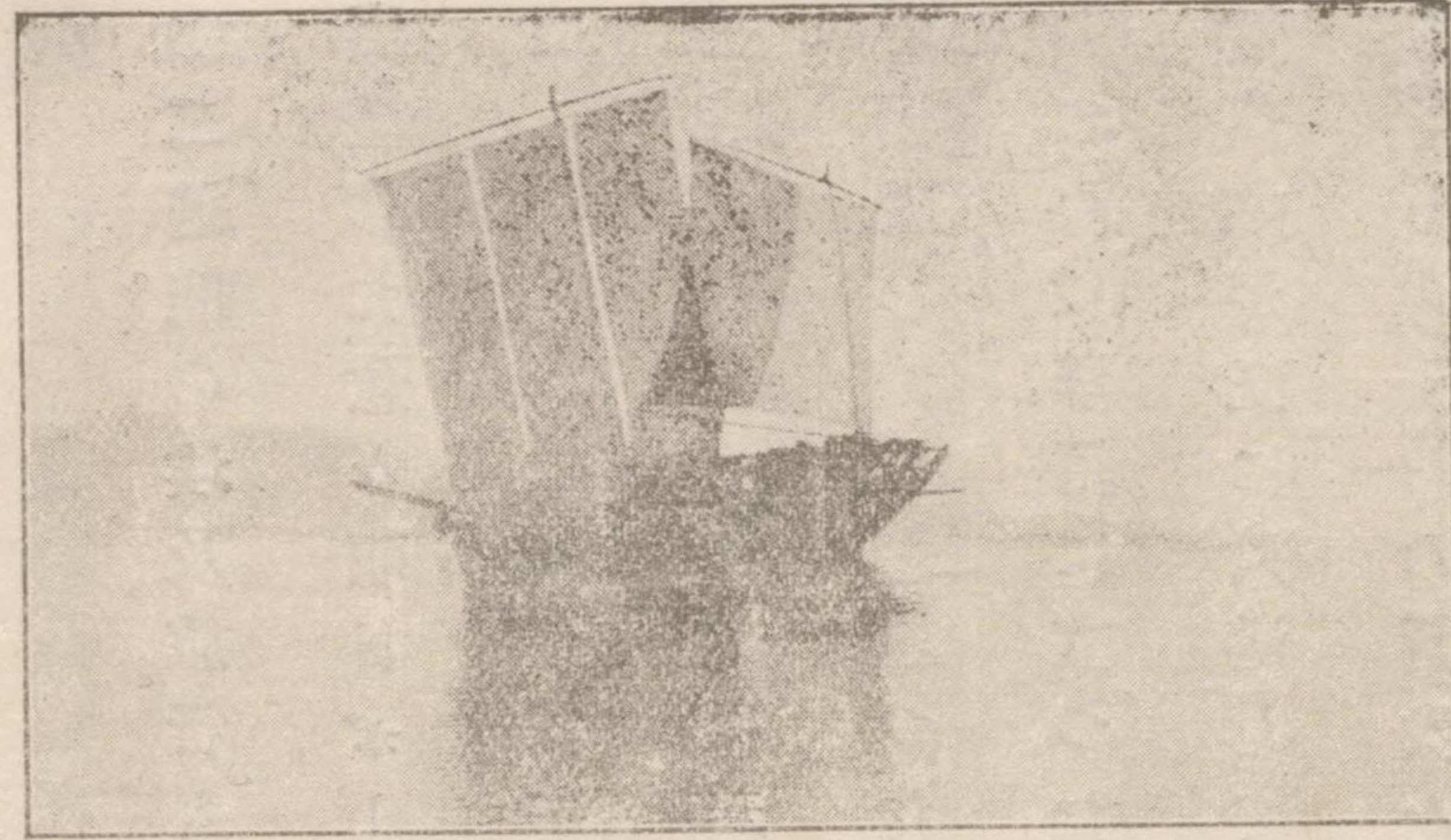
○直ぐに乗船した。石炭積込の都合で、夕六時出帆は延びて、其夜十一時にポートサイドを解纜して、スエズの堀割に這入つた。若し我々が安閑として、カイロを出



歐洲繪行脚 終

の前に現はれた。借て又これからこんな黒っぽい景色を描かなければならぬのかと思ふと、此内にも捨て難いよい所がありながら、尙ほ伊太利邊の強烈な刺戟ある色彩を回顧せずにはゐられなかつた。

發したとすれば、或は乘遅れたかも知れぬ。而して更に又二週間を埃及に暮さなければならなかつたかも知れぬ。



瀬 戸 内 海

□ボートサイド出帆以來、各港共に別に變つた事も無く、昨年來た時と同様な旅を、今反對の方向に歸るに過ぎなかつた。

□紅海は往航と同様に、それ程の酷暑を感じなかつた。印度洋も又極めて平穩であつた。唯香港、神戸間の

臺灣沖で暴風雨に出遇ふて、船に弱い自分は此處では全く死人同様であつた。併し久米氏は存外に丈夫で、神戸に着く迄殆んど船暈病に侵されなかつた。

□斯くして我々は、三月二十二日無事神戸に着いた。暫時見なかつた懐しい日本の風景は、宛ら薄墨で描いた日本繪の様に、自分等



明治四十四年十一月二十日印刷  
明治四十四年十一月廿三日發行

歐洲繪行脚  
正價金參圓

著者 三宅克己

發行者 木澤孚

東京市本郷區湯島切通坂町廿五番地

印刷者 木村龜作

東京市日本橋區兜町二番地

印刷所 東京印刷株式會社



發行所

東京市本郷區湯島切通坂町廿五番地  
電話 下谷二四八三番

畫報社

振替口座東京一八二〇六番



8.4.30



334  
150



